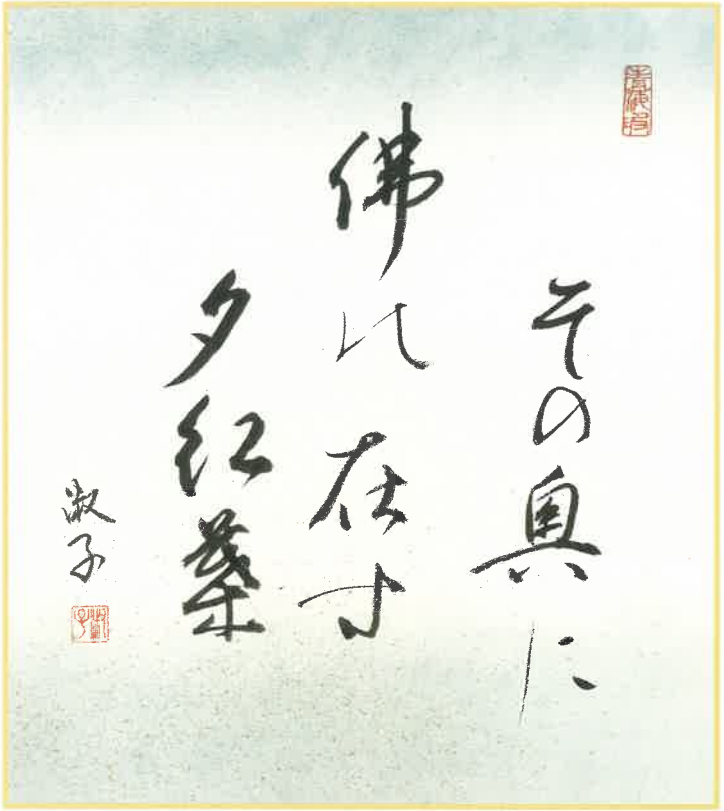
現代俳句

徳島



徳島県現代俳句協会
2020年3月　第8号

表紙の句

その奥に佛の在す夕紅葉　　**船越　淑子**

一読して静かな山中の晩秋の情景が思い浮かぶ。「この奥に」だと実写めくが、「その奥に」というと限定された場所でなく広がりがあり心象めいてくる。佛の在すとは作者の祈りの心の現れで自分を助けてくれる究極の場所の存在を確信しているのだと思う。紅葉は散る前に真っ赤に色づき、そして散っていく。今が一番燃えている時という意味だろうか。いずれにしてもこの一句からは作者の佛の見守りの中に身を置いた穏やかさが感じられる。

松家京子

～生き方考～　徳島県現代俳句第八号

徳島県現代俳句協会会長　船越　淑子

最近「寂聴九十七歳の遺言」を文学書道館で求めた。予てより読んでみたいと思っていたので迷わず二冊買った。一冊はお友達に差し上げる物である。

私は自分の事より人の喜んでくれるのが何より嬉しくついつい沢山買ってしまう。他人には買うのが好きなのだと思われているらしい。しかし敢えて自説は曲げようとは思わない。ところがこの本を読み進むに当って寂聴先生の何時も説かれる「忘己利他」、最澄（天台宗の開祖）は自分のことは忘れ他人の利益になる様にすることは慈悲なりと申されている。口はばったい様だが遠からず私の行動している現状は最澄の教えを実践しているのだと少しだが嬉しく思った。

お土産を買う時考えているより少々多く買う事にしている。人とのコミニケーションは土産の大小に関わらず、「私の事を思っていて呉れている」と。心の感謝問題に尽きるのだ。遥遥提げて帰って来たものを上げる時の僅かな倖せ感、頂いた時の有難感は殊の他嬉しいものである。

珍しいものを買って帰ったり、手造りのものを上げて美味しい美味しかったと云っているその嬉しそうな顔を見る時、大根を何本も千切りにしていたしんどさも吹っ飛んでしまって生きている事を実感する瞬間でもある。

人生の何たるかを切々と説いて居られる寂聴九十七

歳の悟りの心に韻く遺言の一書の触り。

生きることは愛すること。愛することは許すこと。何度繰り返しても「別れ」は辛く苦しい。孤独は人間の皮膚、苦しみは人間の肉。生きている今がどんなに辛くても必ず変わる。明日の事は判らないが笑顔を忘れない様に。仕方がないと諦めずに闘う。楽しいことだけを考えよう。今この時を切に生きる。一番好きなことが「才能」であり、この世でやりたいことを全部やる。今の自分に出来る範囲で充分だ。人間の一番の美徳は「優しさ」であり最高の財産は友達だ。死んでも魂となって愛する人を守る。矛盾だらけのこの世だが耐えられない苦しみを乗り越えた先には上向きの世が待っている。一刻一刻を喜んで生きようと結んで居られる。

〜酒場詩人〜　　**幹事　青木　慧**

BS放送TBSで放送されている「酒場放浪記」を毎週のように見る。酒場詩人の吉田類が居酒屋などを飲み歩く番組で、結構人気があるようだ。東京周辺が多いが、全国各地の飲み屋に現れる。徳島市へも来たことがあるらしい。吉田類と言えば俳句愛好会「舟」の主宰でもある。高知県出身で、番組の中で「土佐鶴」や「酔鯨」など高知の酒を巧みに紹介する。この番組がよいのは、吉田類が店主や店内の飲み客と自然に語り合い、見ているこちらまでカウンターにいるような気分にさせてくれることだ。たまに「角打ち」の場面もある。角打ちとは酒屋で買った酒をその場で、簡単なアテで呑ませてくれることである。一時間に十五分番組が四本放送されるのだが、店を後にする吉田類の後ろ姿に、類の一句が紹介される。それも楽しみの一つである。また番組の中で、肴についても店主と類、そして客までもが薀蓄を傾ける。俳人がこよなく酒を愛する姿を、酒を嗜まない人にも見ていただきたい番組である。

この度図らずも身に余る幹事の役を仰せつかりました。皆様のご協力をいただきながら務まれば幸いです。

（「酒場放浪記」はBS・TBSで毎週月曜日午後九時放送開始）

つるり落つ玉蒟蒻とわだかまり　　類

令和元年活動記録

総会・吟行句会、第二回写楽忌句会、夢道忌俳句大会参加。例会一回、忘年句会（十月の吟行句会は中止）と計五回の研鑽の場を持った。会報七号を発刊した。詳細は以下の句会記録のとおり。

☆　**第二回写楽忌句会**

平成三十一年三月七日（木）

於・内町公民館　　参加者27名

選者は、上窪青樹、丁山俊彦、船越淑子　（五十音順）

最優秀賞

貝塚のてつぺん騒ぐ抱卵期　　奈賀　和子

優秀賞

竪穴は大部屋一つ春の風　　松家　京子

地下足袋をそと押し返す春の土　　髙木　閑人

佳作

海にまだ雨の残りし写楽の忌　　船越　淑子

藩政の松の光陰写楽の忌　　日下　静代

写楽絵の見栄切る五指や風光る　　上窪　則子

花冷えや写楽現世をどう描く　　川上左恵子

羊腸の道は遺跡へ下萌ゆる　　原田　厚子

啓蟄や辰砂は生命の色ならむ　　二橋　満璃

☆　**総会と吟行句会**

平成三十一年三月三十一日（日）

於・大鳥居苑　　参加者29名　（三句出句）

ドイツ館、賀川豊彦館、霊山寺吟行

霊山寺・ドイツ館周辺　　長町　淳子

新元号を明日に控えた日、ドイツ館前広場では周囲の山々は芽吹き、鳥は囀り桜は満開を待つばかり。チューリップはじめいろんな花に囲まれ自然を満喫した。

続いて賀川豊彦館を一巡した。賀川の生涯かけての事業は世界平和運動、教育著作活動、友愛、相互平和を求めて闘った世界の偉人である。現在でも彼の活動は様々な組織で引き継がれて生きている。ノーベル平和賞に四度もノミネートされた偉人、郷土の誇りでありこの功績に感動した。

霊山寺では平成最後と八十八ヶ所参りで賑っていた。和歌山からは紀州講中の御接待があり、蜜柑を頂いた。いよいよ本日の会場「大鳥居苑」で三句提出。定刻に総会が始まり船越会長挨拶、安曇統太氏の会計報告、その他提案事項もスムーズに承認され終了。

句会は船越会長、上窪副会長、大島先生、今岡先生、青木先生の選評があり、二橋満璃氏の朗朗披講で句会終了。「大鳥居苑」の美味しい料理と美酒に酔い和やかな雰囲気で楽しい一日を過ごしました。

ベートーベンの像

総会（大鳥居苑）

当日の一句　（○は選者）

桜東風十二音階奏でたり　○船越　淑子
ベートーベンの右手が投げし桜かな　○上窪　青樹
花むしろ昼寝の虫になりにけり　○今岡　直孝
指揮像の十指生き生き風光る　○大島　宏昭
桜五分ベートーヴェンが急かしをり　○青木　慧
菜の花や黄泉の国から椰子次郎　安曇　統太
花衣ベートーベンはモーニング　伊賀　信子
豊壽の髭はブロンズチューリップ　梅岡美沙子
花冷や少し赤字の決算書　尾原　葛
山桜歓喜の歌が降り来たる　上窪　則子
これを見よベートーヴェンの指す桜　K・ベック
銅像の指揮の指先花の冷え　島田　正子
平成の今し最後の花を愛で　住友セツ子
友好の国旗はためく花の風　髙田スミ子
あたたかやバラッケに買ふドイツパン　奈賀　和子
花冷やじゃんけんの手は石となり　仲　空
桜東風第九の絆乗せて吹け　中平　益美
花の山背に指揮すベートーヴェン　中山　孝子
新元号ときめく明日桜咲く　長町　淳子
市原悦子しだれ桜に声しみる　奈須野惠香
ブロンズの松江所長へチューリップ　西村　富子
「忍耐」てふ少佐筆跡弥生尽く　原田　厚子
国境なき人道主義や山笑ふ　二橋　満璃
花に風ビクトルユーゴ傍らに　益田　梅子
俘虜居りし史実遥かに山笑ふ　松家　京子
雲の影移る遠山梨の花　山口　晴子
桜草豊壽見てるドイツ館　やまだ胡瓜
散るといふ美しきことへと桜満つ　山之口ト一
よろこびの歌煮つめれば花桜　吉岡えい子

☆　**第一回　例会**

令和元年六月三十日（日）
於・文学書道館　参加者13名

当日の一句　（○は選者）

一途とは得難き境地浮いて来い　○船越　淑子
街に減るもののひとつに蛇の衣　○上窪　青樹
鮎くはへ狆五右衛門になりきりぬ　○今岡　直孝
路線バス空つぽで来る立葵　○青木　慧
ネクタイをパズルのように結いて夏至　安曇　統太
梅雨晴間息切れしたる洗濯機　K・ベック
山梔子や帯藍色の文庫本　上窪　則子
梅花藻や越さむ二の堰三の堰　住友セツ子
靴屋には靴ばかりある不死男の忌　髙木　閑人
美しく斯くもしぶとく夏薊　奈賀　和子
AIもすなる恋の句浮いてこい　二橋　満璃
梅雨滂沱銀輪の子を洗ひ上ぐ　松家　京子
桜桃忌コロッケ温き紙袋　吉岡えい子

（五句出句）

☆　**夢道忌俳句大会**

令和元年十月五日(土)

於　藍住町役場四階　　参加者52名

兼題・夢道忌　席題(柿)　当季雑詠　の三句

最優秀賞

耳朶が真っ赤になる母カンナ咲く　　奈須野惠香

優秀賞

ここからは神の領域熟柿落つ　　松家　京子

鯊を釣る少年一人名田の岸　　青木　秀明

国ぢゅうの月光あつめ嫁ぐ娘に　　山之口ト一

甘柿の樹齢八十勢ひなほ　　原田　厚子

大西一騎特選

生涯を妻恋ふ暮し夢道の忌　　松家　京子

遠藤和良特選

君もまた窓際族か木守柿　　山之口ト一

上窪青樹特選

廃校の亀の子束子夢道の忌　　奈須野惠香

西池冬扇特選

次郎柿甘く四角くなる夢を　　青木　秀明

船越淑子特選

甘柿の樹齢八十勢ひなほ　　原田　厚子

山田譲太郎特選

フェルメールの青空の青柿静か　　梅岡美沙子

☆　**第56回県俳句連盟大会**

令和元年九月二十九日(日)　於　県立文学書道館

兼題　「吾亦紅」「秋の声」

現俳協会員の入賞者の作品を紹介する。

県知事賞

したたかは母の遺伝子吾亦紅　　松家　京子

連盟賞

畏みて麓服を織る秋のこゑ　　二橋　満璃

自画像のパイプの煙吾亦紅　　日下　静代

箒目の石に遊ぶや秋の声　　吉岡えい子

秋の声ポン菓子ポンと空に舞ふ　　伊賀　信子

チェ・ゲバラに憧れし日や吾亦紅　　山之口ト一

選者特選賞

日下静代・松家京子・吉岡えい子

☆　**忘年句会・懇親会**

令和元年十一月二十四日(日)

於　ホテルクレメント　参加者31名　(三句出句)

☆　**船越淑子特選評**

リースから注連縄に替へ無信心　　中平　益美

クリスマスが来て、ものの一週間も経たない内にお正月がやって来る。この宗教的異様さを作者は我々を無信心者と位置づける。日本人としては変だと思うことだ。しかし、クリスチャンで無くてもジングルベルで念願の

ものをサンタクロースが持って来て呉れると云う子供にとっては夢の一夜であり、親達も子供の喜び驚く様を見て喜ぶのだ。逆にお正月は地味ではあるが年初を祝う神国には粛々とした麗しい行事である。虚を突いた作品だ。

☆　**上窪青樹特選評**

寒鯉や胃にみづうみのできてをり　　今岡　直孝

句意からすると真鯉だろう。動きが鈍くなって、水の色に染まって潜む寒の鯉。見つめていると自分も水中に潜んでいるような、或いはその湖自体が自分の体内にあるような錯覚に囚われる。その感覚を「胃にみずうみ」と比喩して個性的な写生としている。この場合の寒は、単なる寒さ冬と同意と読むべきだろう。

☆　**今岡直孝特選評**

海鼠腸の一箸ごとに海の鳴る　　高木　閑人

左党にはこたえられない好肴である。特に日本酒が良い。「海鼠腸」の一語で釣られた訳ではない。「一箸ごとに」との具体動作を伴わせ、「海の鳴る」と比喩を用いて強い訴求力となり、読み手に迫ってくるからだ。芥川龍之介の著名句「木がらしや目刺にのこる海の色」を直ぐに想起するので、海鼠腸を食する時に「音がするのかね」との疑義もあろうが、作者の五感を尊重したい。ゆつくりと慈しむように賞味している姿が目に浮ぶ。

☆　**大島宏昭特選評**

冬ぬくし釘打つ音のこだませり　　井形　順子

小春日が続き、ものの影も、物音もゆるんだ様な冬の一日。「お父さんこれ組み立ててよ」「はいよ」最近はDIY店や百円ショップへ行けば、多種多様な品物があり自前の日曜大工が始まる。釘を打つ手に家族の信頼の視線、釘の響きが甘くこだまして・・・、やがて母さんの「お茶にしましょか」となる。

☆　**青木慧特選評**

散るための余力を少し冬紅葉　　上窪　則子

温暖な地域では冬に入ってから本格的な紅葉の時を迎えることが多い。寒さが厳しくなってゆく冬景色のなかの紅葉は、美しさが一層際立つこととなる。余力を残しているからこそ紅葉は映え、落ちてなお美しいのかもしれない。そして、散るための少しの余力が必要なのは、人間も同じかも知れないとふと考えさせられた。美しいものには儚さが付き纏うことを教えられる。

当日の一句　(○は選者)

煩悩の未だ蠢めく年のくれ　　○船越　淑子

十二単衣銀粉のよう初時雨　　○上窪　青樹

寒鯉や胃にみづうみのできてをり　　○今岡　直孝

閉店の暖簾夜寒を折りたたむ　　○大島　宏昭

生家いま泡立草の陣迫る　　○青木　慧

毀れやすき人というもの寒昴　　安曇　統太

モナリザもゴッホも孤独息白し　　伊賀　信子

忘年会　ホテルクレメント

一度しか履かぬ足袋買う日曜日　井形　順子
散紅葉黒蛇たちを眠らせる　いとう奏杜
時雨来る砂の器のごと逝けり　梅岡美沙子
冬耕や道路を急ぐトラクター　馬留　寛
冬至粥たらふく喰って大あくび　尾原　葛
生き恥を色ににじませ紅葉風　K・ベック
散るための余力を少し冬紅葉　上窪　則子
麁服の誉れ引き継ぐ冬日和　幸田　清子
幾歳を生きし喜び年忘れ　住友セツ子
海鼠腸の一箸ごとに海の鳴る　髙木　閑人
文面に「妻永眠」と冬北斗　髙田スミ子
枯野人と紛ふ人形祖谷暮色　奈賀　和子
しぐるるやことばにならぬ手紙書く　仲　空
南海トラフを机上に広げ冬灯　中川　秀司
リースから注連縄に替へ無信心　中平　益美
美人湯の看板娘冬案山子　長町　淳子
初氷動き始めた母の杖　奈須野惠香
貼り足せる一円切手一葉忌　二橋　満璃
だきしめるもののほしくて晩秋　益田　梅子
心底に秘めたるマグマ神の留守　松家　京子
冬蝶や友待つ駅のコンコース　森口　恭子
反骨に目覚め猫族冬毛立つ　安田　建公
鮟鱇もお尋ね者も吊されて　山之口ト一
神の留守猫に日課のありにけり　吉岡えい子

☆　**現代俳句列島春秋掲載句**

1月　とりけもの雪の白さの闇に寝ぬ　本城　佐和
2月　炊き立ての飯生み立ての寒卵　川上左恵子
3月　無辺とは赤子のつかむ春の空　松家　京子
4月　錫杖の音遠ざかる夕桜　位頭美智子
5月　蛇の衣自分の中を通り抜け　曽根　燦
6月　植田いまいちまいづつに載る暮色　船越　淑子
7月　麁服の貢進まぢか麻畑　藤井　敏子
8月　八月の大きな足の跡があり　油津　雨休
9月　少年兵カラシニコフを抱く月下　山之口ト一
10月　花すすき理科室の窓開け放つ　梅岡美沙子
11月　筋肉にそれぞれ名前蓮根掘る　伊賀　信子
12月　木偶の腕もろぶたに積み雪催　上窪　青樹

☆　**第五十六回現代俳句協会全国俳句大会**

特選・秀逸

鍬を担いで陽炎になりに行く　中川　秀司

特選

生きるとは大きな仕事冬林檎　中川　秀司

入選

青木慧・安芸紀子・井形順子・梅岡美沙子・日下静代
小山やす子・住友セツ子・髙木閑人・中川秀司・中平益
美・長町淳子・西村富子・原田厚子・二橋満璃・松家京
子・山口晴子・山之口ト一・油津雨休

すだちの花

徳島県現代俳句協会
前会長　斉藤　梅子

徳島県の花に指定されている阿波特産の「すだち」は私たち県民には四季を通して一日として欠かせることの出来ない食卓の必需品となっている。

県下でもやや温暖な地区に多く栽培され、主として小松島市、勝浦町、佐那河内村、板野町一帯が中心地である。

昔から家々に一・二本は植樹され自家用として花を愛で、時にはその芳香を楽しみ、夏には食卓にということで、大切に代々受け継がれて来、大木になっている家を見かけることがある。

丸くて緑いろ、ころころと親しみがある。最近は温室栽培のものが三月下旬ころより出荷されるようになり、一粒が百円、二百円と高値で京阪神市場に売られている。直径は二、三センチメートル位で現在では品質改良が成され、種の無いものが主流になってきている。

路地物は主として八月の旧盆前後に収穫、出荷の最盛期を迎える。色は温室ものに比して力強い濃みどり色が印象的である。

「すだちの花」は、ほんのりとした甘ずっぱい匂いの花で柑橘類特有のものだ。

花の大きさはそれほどでもないが白くて五弁。葉は披針形で喬木、枝条の節間は短くて棘がある。また「すだち」の香りは果皮のなかの植物精油リモネンともいわれている。そしてこの精分が芳しい匂いを醸すのだとも…。

柚子の木に接木する「スダチ」は他の柑橘類と同じように、春・夏・秋の三回にわたって枝が新しく伸びて花を咲かせるという。原産は遠く東南アジアだとか。

収穫は一粒づつ棘のある枝を分けながら穫り進むので大変である。これが大木ともなると長梯子を固定しての作業となるので、生産農家泣かせの仕事となる。

他県へ旅行に行った折、よく九州の「カボス」と間違えられて、嫌な思いを体験したことが、二度ならず三度ある。これは一にPR不足のなせるところと反省しきりである。

しかし、「すだち」は徳島県を代表する果樹として先年催された国民文化祭の「マスコットキャラクター」としても大いに活躍した。徳島県人にとって「すだち」は料理に、また土産の特産品として欠かせない必携品的存在の毎日である。

平成二十一年三月一日発行
「現代俳句」四百九十号から転載

☆　二〇二〇年度　行事予定

3月7日(土)　写楽忌句会　中止
3月29日(日)　総会・吟行句会　中止
5月30日(土)　例会　(文学書道館)十三時
8月29日(土)　例会　(文学書道館)十三時
10月10日(土)　夢道忌句会(藍住町総合文化ホール)
10月24日(土)　吟行句会(未定)　三句
11月29日(日)　忘年句会(ホテルクレメント)

☆　「四季の森」

まんさくの縺れをほぐす山の風　　船越淑子

「まず咲く」が語源といわれるまんさくは葉にさきがけて花が咲く。「縺れ」とは互いに絡み合う様子。まんさくの花の小さなつぼみには4枚のひも状の花びらが所狭しと収納され、早春の日差しにちりちりとふきこぼれるように咲く。まだまだ頼りない日差しの中で縺れるように咲く姿は華やかさとは程遠く心細くさえある。山からの風がいとし子の寝癖の髪を梳くようにまんさくの鮮やかな黄色に触れる。

土肥あき子(俳人)
令和二年二月五日　徳島新聞夕刊から転載

編集後記

☆今年度の総会で役員の一部改正がありました。一名欠員であった副会長に今岡直孝幹事が就き、幹事の後任に青木慧氏が就任し役員が充実しました。他の役員には異動ありません。　(京)

☆　俳句に限らずどの分野に於ても、会員数の減少、活動の先細りが悩みの種である。

徳島地区現代俳句協会に於ても、一人減り二人減りと会員数が八十名を切るまでになりました。年末になり四名の入会があり、やっと八十名を確保出来ている状態です。

活動の分野では、三月の第二回写楽忌句会への参加、十月の夢道忌句会への参加と活動の機会が拡がっていると言えます。昨年の十月吟行句会が中止となったことは残念ではありますが、年間六回の会開催は続けていきたいと思っております。

「俳句の風」の投句者は少しずつ増え、全国大会の応募者も増えているのはうれしい限りです。

皆様のご理解とご協力なしには協会の発展はありません。一人が一人を誘い、会に出席するようにいたしましょう。　(満)

事務局連絡先
〒七七〇－八〇七七　徳島市八万町夷山43番地
二橋　満璃　TEL　〇八八－六六八－〇七九六

徳島県現代俳句協会規約

（名称）
第一条　この会は、徳島県現代俳句協会という。

（目的）
第二条　この会の目的は、徳島県現代俳句協会会員が相互研究の場をもち、親睦融和を図ることを目的とする。

（事業）
第三条　前条の目的達成のため、次の事業を行う。
1　俳句大会
2　研究句会
3　その他、目的達成のため必要な事業

（役員）
第四条　この会に次の役員を置く。
1　顧　　問　若干名
2　会　　長　一名
3　副 会 長　二名
4　幹　　事　若干名
5　監　　事　一名
6　事務局長　一名、事務局　若干名
7　会　　計　一名

第五条　役員の任務は次の通り定める。
1　会長は、会務を総括し、この会を代表する。
2　副会長は、会長を補佐し会長に事故あるときは、あらかじめ会長が指名した副会長がこれを代行する。
3　幹事は、会長の諮問に答える。
4　監事は、会計の監査に当たる。

（役員の選任及び任期）
第六条　役員の選任は、総会において行い、任期は二年とし、再選は妨げない。なお、事務局長及び会計は、会長が任命する。

（顧問）
第七条　この会に、顧問若干名を置くことができる。顧問は、会務について会長に意見を述べることができる。

（会議）
第八条　総会は、年一回とし、必要に応じ臨時総会を会長が招集する。

（経費）
第九条　この会の経費は、本部からの交付金でまかなうが、必要に応じ会費を徴収する。

（付則）
この会則は平成十年四月一日から施行する。

徳島県現代俳句協会役員

会　　長　船越　淑子
副 会 長　上窪　青樹
　　今岡　直孝
幹　　事　大島　宏昭
　　青木　慧
監　　事　住友セツ子
　　安曇　統太
会　　計　二橋　満璃
事務局長　松家　京子

令和2年　　**徳島地区現代俳句協会名簿**　　2020/3/1

	氏　　名	所属結社		氏　　名	所属結社		氏　　名	所属結社
1	青木　慧	青海波	36	鈴江 余子	青海波	71	美田 佐喜子	青海波
2	青木 秀明	風嶺	37	住友 セツ子	青海波	72	村島 まさこ	青海波
3	赤坂 恒子	船団	38	曽根　燦	風嶺	73	森　幸子	青海波
4	安芸 紀子	青海波	39	髙木 閑人	風嶺	74	森口 恭子	青海波
5	安曇 統太	風嶺	40	髙田 スミ子	青海波	75	安田 建公	風嶺
6	阿部　久	青海波	41	田子 閑野子	風嶺	76	山口 晴子	青海波
7	伊賀 信子	風嶺	42	谷本 栄子	青海波	77	やまだ 胡瓜	風嶺
8	井形 順子	風嶺	43	玉田 玄子	青海波	78	山之口ト一	風嶺
9	石井 政子	青海波	44	豊田 美枝子	青海波	79	油津 雨休	青海波
10	市原 光子	海程	45	奈賀 和子	青海波	80	吉岡 えい子	風嶺
11	いとう 奏杜	風嶺	46	仲　　空	風嶺			
12	位頭 美智子	青海波	47	中川 秀司	樫			
13	今岡 直孝	鷹・天籟通信	48	中野 貴美	青海波			
14	魚井 遊羽	青海波	49	中平 益美	青海波			
15	宇川 清英	青海波	50	長町 淳子	青海波			
16	卯坂 久仁子	青海波	51	中山 孝子	青海波			
17	馬留　寛	風嶺	52	中山　優	青海波			
18	梅岡 美沙子	風嶺	53	奈須野 惠香	風嶺			
19	大島 宏昭	無所属	54	西　之子	青海波			
20	大塚 紀久子	青海波	55	西木 恵子	犀・航標			
21	大塚 通子	青海波	56	西村 富子	青海波			
22	大野 拓山	青海波	57	長谷川公子	青海波			
23	小田 隆子	青海波	58	林　　戒	無所属			
24	尾原　葛	麦	59	羽山 章鵬	GINの会・風嶺			
25	片山 暁子	青海波	60	原田 厚子	青海波			
26	金森 久美子	青海波	61	板東 ユキ子	青海波			
27	上窪 青樹	風嶺	62	福本 徳恵	青海波			
28	上窪 則子	風嶺	63	藤井 敏子	青海波			
29	川上左恵子	青海波	64	船越 淑子	青海波			
30	倭　瑠	風嶺	65	二橋 満璃	青海波			
31	日下 静代	青海波	66	ふなとがわ たく	無所属			
32	K・ベック	風嶺	67	本城 佐和	青海波			
33	幸田 清子	青海波	68	益田 梅子	風嶺			
34	小山 やす子	海程	69	松家 京子	青海波			
35	島田 正子	麦・藍の風	70	松原 雅子	犀・航標			